

## 悼簫庵主人用機山武田信玄公詩韻

簫庵主人を悼み 機山武田信玄公の詩韻を用いる。

吟斷梅花淑氣遲。

吟斷梅花 淑氣遅し。

曾聞愛誦古豪詩。

曾て聞く 古豪の詩を愛誦すと。

風流眞率人何在。

風流 眞率 人何にか在る。

畫卷長留筆一枝。

画卷 長く留める 筆一枝。

吟斷…吟じ終える。

淑氣…春の穏やかで爽やかな気配。

眞率…ありのままで飾らない。まじめ。ひたむき。

## 新正口号

武田信玄（戒名は法性院機山信玄）

淑氣未融春尚遲

淑氣未だ融せず 春なお遅し

霜辛雪苦豈言詩

霜辛、雪苦、豈（あ）詩を言わんや

此情愧被春風咲

此の情、愧（は）づ 春風に咲（わら）われんことを

吟斷江南梅一枝

吟斷す、江南の梅一枝

## 癸卯之晦弔悼吉田浩堂君

吉田浩堂君を弔悼す。

昨集樗門餞歲殘。

昨 樗門に集つて 歳残に餞（はなむけ）けし。

浩然傾盞共團欒。

浩然として 盞（さかずき）を傾けて 共に団欒。

東風未到君先逝。

東風 未だ到らず 君 先ず逝く。

具識人生朝露嘆。

具（つぶ）さに識る 人生 朝露の嘆。

吉田浩堂先生：明治三十三年（一九〇〇）生、昭和三十九年（一九六四）一月歿。千葉縣市川市に居す。昭和初年、

二葉書道会松本芳翠先生主宰）に入門。漢詩を仁賀保香城先生に、南画を高橋雲亭先生に師事する。同

文会総務長、毎日展・東方展審査員、（財）書海社理事・審査員、同人会幹事長、翠光会主宰を勤めた。

また、市川美術会の昭和二十八年発足以来のメンバーです。  
歳残…年末。

浩然…心が広くゆったりしている様子。

爲弟爲師是宿因。  
弟と為り 師と為る 是れ宿因。

平生螢雪幾酸辛。  
平生 螢雪 幾 酸辛。

夙超名利塵氛遠。  
夙(つと)に名利を超えて 塵氛 遠く。

養得高情筆有神。  
高情を養い得て 筆に神有り

宿因…前世からのきまり。

螢雪…貧苦にたえて勉強すること。苦勞して學問をすること。苦學。

酸辛…苦しくて耐え難い。

夙に…ずっと前から。早くから。

名利…名譽と利益。譽れと徳。

塵氛…汚れた気分。利欲にかかずらう気持ち。

高情…他人が自分につくしてくれた志に対する敬称。

書海泛舟追古賢。  
書海 舟を泛かべて 古賢を追う。

七人蘭契亦前縁。  
七人 蘭契 亦 前縁。

一朝騎鶴去天外。  
一朝 鶴に騎つて 天外に去る。

萬里航程頓寂然。  
万里 航程 頓(とみ)に寂然。

蘭契…心の通いあった友人の交わり。その交情の美しさを蘭の香氣にたとえていう。

前縁…前の世からの約束ごと。前世の因縁。

航程…ある船・飛行機の航行する距離。また、その過程。

寂然…ひっそりと静かなさま。

野方翁以余所作龍字手刻入于年賀狀有詩次韻以酬

野方翁 余の所作竜字を以て手づから年賀狀に刻入、詩あり次韻以て酬ゆ。

戒愼于時誤魯魚。

戒愼時に 魯魚を誤り。

竿竿己巳校讐初。

竿竿 己巳 校讐の初。

臨池雅客愛文字。

臨池の雅客 文字を愛し。

刻破飛龍形象書。

刻破す 飛龍 形象の書。

戒愼…氣をはりつめて用心する。

魯魚…文字の誤り。(八十六頁参照)

校讐…文章や字句を比較照合して、誤りをただすこと。校正。

雅客…風雅な人。上品な人。

形象…美的な対象としてのものの姿。

〔原韻〕

貴畜窮陰化小魚。

貴畜 窮陰 小魚に化す。

籃中掬取備春初。

籃中 掬(すくい)取つて 初春に備える。

庶幾拜受師允許。

庶幾(こいねがわ)くは 師の允許を拝受し。

巨大白龍収葉書。

巨大の白竜を 葉書に収めん。

窮陰…陰氣のきわまったとき。冬の末のこと。

籃中…籠の中

庶幾…強く希望する。切に望む。

## 偶 成

人生行路奈難期。

人生行路 期し難きを奈(いか)んせん。

四皓訂盟少一卮。

四皓 訂盟して 一卮を少(か)く。

把酒羈客肝膽照。

酒を把(と)つて 羈客 肝胆を照らす。

樂夫天命復奚疑。

夫(そ)の天命を楽しんで 復た奚(なん)ぞ疑わん。

行路…生きてゆく方法。世わたり。

四皓…「皓」は白いこと、「四皓」はあごひげと眉が白い四人の老人の意味。

商山四皓Ⅱ中国秦代末期、乱世を避けて商山(陝西省商県)に入った東園公・綺里季・夏黄公・甪里の四人の隠士。みな鬚眉(あごひげと眉)が白かったのでこのように呼ばれ、中国の影響を受けた日本では室町時代から江戸時代にかけて画題でよく用いられた(「商山四皓図」)。

訂盟…同盟・条約をむすぶ。

卮…さかずき(さかづき)。四升入りのまるい大杯。

羈客…旅客。旅人。

肝胆…本当の考え。本心。『史記』(淮陰侯)に「披腹心輸肝胆Ⅱ腹心を披き肝胆を輸す」とある。

甲辰元旦 昭和三十九年

萬邦齊仰會盟秋。

万邦 斉しく仰ぐ 会盟の秋。

春滿東瀛大八洲。

春は満つ 東瀛の大八洲。

一擲乾坤爭霸地。

一擲乾坤 覇の地を争う。

瞳瞳初日上檣頭。

瞳々として初日 檣頭に上る。

万邦…万国。

会盟…各国が会合して誓いあうこと。

東瀛…東の方の海。東海。日本。

大八洲…日本国の別名。

一擲乾坤…乾坤一擲。負ければ滅びる危険を承知で、運命をかけて勝負する。

覇…武力や権力で国や多くの人々の上に立つ。競技などで優勝する。

瞳々…やさしく。可愛く。素直に。

檣頭…帆柱の先。マストトップ。

## 震題 紙

朝夕駢毫學楮顏。

朝夕 毫を駢(か)つて 楮顔を学ぶ。

塗鴉敗紙忽成山。

塗鴉 敗紙 忽ち山を成す。

震題未就箋猶白。

震題 未だ就らず 箋猶白し。

忙了臨池半日閑。

忙を了す 臨池 半日の閑。

楮顔…「楮遂良」と「顔真卿」。  
塗鴉…落書き。

## 観中日書藝展

中日書芸展を観る。

遠游千里鑑鷺群。

遠游千里 鷺群を鑑（かんがみ）る。

墨氣稜稜敵萬軍。

墨氣 稜々として 万軍に敵す。

殘夢今朝烽火燦。

殘夢 今朝 烽火燦（さん）たり。

紫金城外掃妖雲。

紫金城外 妖雲を掃（はら）う。

遠游…学問・修行などのために、遠くの土地に行く。

鑑る…先例や実例に照らして考える。手本として考え合わせる。

稜々…気性が強く厳しい様子。

烽火…戦争。

紫禁城…故宮。中国北京市に所在する明朝の旧王宮である歴史的建造物。ユネスコの世界遺産（文化遺産）

となっている。面積は七二五〇〇平方メートルあり、世界最大の宮殿の遺構である。別称の故宮とは

「古い宮殿、昔の宮殿」という意味で、現在は博物館（故宮博物院）になっている。

妖雲…不吉な前兆を感じさせるような雲。

## 青光書塾二十周年

退毫成塚鐵門穿。

退毫 塚を成し 鉄門 穿（うが）つ。

窗雪螢光二十年。

窓雪螢光 二十年。

學藝由來畢生業。

学芸 由来 畢生の業。

仰望立嶽憶前賢。

仰望して嶽に立ち 前賢を憶う。

窓雪螢光…「螢の光、窓の雪」。苦勞して勉学に励むこと。

『晋書』（車胤伝）に「家貧不常得油、夏月則練囊盛數十螢火以照書、以夜繼日焉」（家が貧しく、いつもは油を得ることができなかったので、夏の夜に螢を数十匹つかまえて絹の袋に入れ、その光で書物を照らして、昼に夜を継いで勉強した。）とあり、また、『蒙求』（孫康映雪）に、「康家貧無油、常映雪讀書」

（孫康は家が貧しく灯油が買えず、窓辺に雪を集めて、その明かりで書物を読んだ。）とある。

こうした努力の結果、後にこの二人とも高級官吏に出世したという故事に基づく。

畢生…生を終える時までの(長い)期間。死ぬまでの間。一生。終生。一代。  
仰望…あがめ、期待する。また、尊敬し慕う。

## 題竹翁米壽筵

### 竹中竹堂翁迎米壽而製壽筵八十八以贈知己

題竹翁米壽筵、竹中竹堂翁米寿を迎えて寿筵八十八を製し以て知己に贈る。

玲瓏扶老杖。

玲瓏たり 老を扶(たす)ける杖。

八十八琅玕。

八十八 琅玕。

歳歳康而壽。

歳歳 康(やすらか)にして寿。

年年守節安。

年年 節を守って安し。

玲瓏…美しく澄みきっている様子。

琅玕…美しい文章。

年年…年々歳々。毎年何かが行われるようす。くる年もくる年も。毎年毎年。

### 浅間神社筆塚竣成次鳴雪主盟詩韻

浅間神社筆塚竣成、鳴雪主盟の詩韻に次す。

年年歳歳獻書來。

年々歳々 献書して来る。

筆塚今看神苑隈。

筆塚 今看る 神苑の隈。

鳥迹成文天雨粟。

鳥迹 文を成して 天 粟を雨(ふら)す。

櫻花繚亂浅間臺。

櫻花 繚乱たり 浅間台。

浅間神社筆塚…静岡浅間神社献書会が建設、昭和三十九年四月五日除幕式が行われた。理事長は野中鳴雪。

野中鳴雪…静岡の人で、名は敏、通称は藤平、字は子求、号を鳴雪と称し、初め小野鷲堂流を学び、次いで長

谷川流石に師事し、毎日書道展審査会員等を務めた。

鳥迹…中国古代の伝説で、蒼頡が鳥の足跡を見て文字をつくることを思いついたといわれるところから、文字のこと。

夢拝新營頓寶前。

夢に新營を拝して 宝前に頓（ぬかづ）く。

飛花如雪淨無邊。

飛花 雪の如く 淨（きよめ）無辺。

泰東文化淵源邃。

泰東の文化 淵源邃（ふか）し。

美俗淳風千古傳。

美俗 淳風 千古に伝える。

泰東…東洋。

美俗…よい風俗や習慣。

淳風…人情のあつい風俗・習慣。

甲辰端午祝加藤洋一君生誕

甲辰端午、加藤洋一君の生誕を祝す。

端午加奇瑞。

端午 奇瑞を加える。

懸弧藤下軒。

弧を懸（か）く 藤下の軒。

洋洋野天鯉。

洋々たり 野天の鯉。

一躍上龍門。

一躍 龍門に上る。

奇瑞…めでたいことの起こる不思議な前兆。

龍門…鯉の滝登りともいわれ、立身出世のための関門、あるいはただ単にその糸口という意味で用いられる。

登龍門とは、成功へといたる難しい関門を突破したことをいうことわざ。

『後漢書』（黨錮列伝・李膺伝）に「是時朝廷日亂、綱紀頽地、膺獨持風裁、以聲名自高。士有被其容接者、名為登龍門。（是の時朝廷日に乱れ、綱紀（こうき）地に頽（お）ち、膺（よう）独り風裁（ふうさい）を持し、声名（せいめい）を以て自ら高くす。士其の容接を被（こうむ）る者有らば、名づけて龍門に登ると為す。）」とあり、李膺は宦官の横暴に憤りこれを肅正しようと試みるなど公明正大な人物であり、司隸校尉に任じられるなど官廷の実力者でもあった。もし若い官吏の中で彼に才能を認められた者があったならば、それはすなわち将来の出世が約束されたということであった。このため彼に選ばれた人のことを、流れの急な龍門（夏朝の皇帝・禹がその治水事業において山西省の黄河上流にある龍門山を切り開いてできた急流）を登りきった鯉は竜になるという伝説になぞらえて、「龍門に登った」と形容したという。

## 奥州紀行 仙臺驛頭次榎陵君韻

奥州紀行、仙台駅頭 小野榎陵君の韻に次す。

江山隔絶閱星霜。

江山隔絶 星霜を閱す。

尺素綿綿百慮忘。

尺素綿々 百慮忘れる。

今日驛頭看顔色。

今日 驛頭 顔色を見る。

一逢猶勝字千行。

一逢 猶勝る 字 千行。

奥州…陸奥(むつ)国の異称。白河・勿来(なこそ)の関から北の磐城(いわき)・岩代・陸前・陸中・陸奥(むつ)五か国の総称。現在の福島・宮城・岩手・青森の四県と秋田県の一部にあたる。

奥州紀行…昭和三十九年五月二十三日、芳翠先生は第十回東北書道展の審査のため、仙台の宮城県神社庁へ。

この機会に先生との松島旅行を小野榎陵先生が企画された。審査下見ののち煙雨の中、双観山を経て宿

舎の松洲荘へ。二十四日は仙台に戻り審査、瑞鳳閣泊。二十五日、晴天の中、蔵王エコーライン観光。

青葉城趾・蔵王登頂ののち青根温泉ホテルニュー蔵王泊。二十六日急行青葉で二本松市へ。野内鶴斎先

生らが出迎え、岳温泉佐藤旅館へ。翌日本宮駅より帰宅された。

隔絶…遠くはなれて連絡が途絶える。

星霜…年月。歲月。

尺素…短い手紙。

百慮…さまざまな考え。

## 同 松島再遊

廿年再度過松洲。

廿年 再度 松洲を過ぎる。

唯缺老來杯獻酬。

唯欠く 老来 杯の獻酬。

景觀依稀似郷海。

景觀 依稀として 郷海に似たり。

瑠璃浮艇憶曾遊。

瑠璃 艇を浮べて 曾遊を憶う。

松洲…松島。

獻酬…酒席で、相手に酒をすすめたり返杯したりする。

依稀…よく似ている。

郷海…芳翠先生は愛媛県伯方島の生まれ。

瑠璃…紫がかった紺色。「瑠璃色」の略。

曾遊…以前に遊んだことがある。または、前に一度行ったことがある。



同

八百八洲姿態多。

八百八洲 姿態多し。

古松偃蹇映明波。

古松 偃蹇 明波に映ず。

飛龍夾水對蹲虎。

飛龍 水を夾んで 蹲虎に對す。

巖岫忽開聽棹歌。

巖岫 忽ち開いて 棹歌を聴く。

八百八洲…数多くの島の意から、日本。日本国。

偃蹇…がっちりしているさま。

明波…明るい波。

蹲虎…蹲(うずくま)る虎。

巖岫…岩山の洞穴。

棹歌…さおで船を進めるとき歌う歌。船唄。

## 同 藏王登頂

藏王五月度崔嵬。

藏王 五月 崔嵬を度(わた)る。

山上尚看殘雪皚。

山上 向看る 殘雪の皚を。

行冒寒颿極絶頂。

行々 寒颿を冒して 絶頂を極む。

龍淵湛碧一湖開。

竜淵 碧を湛(た)えて 一湖 開く。

崔嵬…山の、石や岩がごろごろして高くけわしいようす。

皚…明るく白いさま。

寒颿…冷たい暴風。

竜淵…竜の住む淵。昔の名剣の名。

## 芳鶴社中招飲岳温泉席上率賦

翰墨締縁舊與新。

翰墨 縁を締す 旧と新と。

泉樓相會誼何眞。

泉楼 相会す 誼 何ぞ眞。

飛觴懽語不知老。

飛觴懽語 老を知らず。

鳳舞龍吟心自春。

鳳舞 龍吟 心自ら春なり。

芳鶴社中：野内鶴齋先生社中。

締：紐で纏めて締めくくる。また、とけないように約束を結ぶ。

誼：親しみ。好（よしみ）。

飛觴：宴会で觴（さかずき）をやり取りする。さかんに酒を酌み交わすこと。

懽：わいわいと声をそろえてよろこぶ。

鳳舞：鳳凰が舞い遊ぶ。

龍吟：龍吟。琴や笛の音響。

## 讀流石翁遺稿

流石翁遺稿を読む。

吟誦忽疑陪酒仙。

吟誦 忽ち疑う 酒仙に陪するかと。

清聲彷彿在尊前。

清聲 彷彿 尊前に在り。

刼餘世態慨荒廢。

刼余の世態 荒廢を慨し。

揮翰飛觴憶往年。

揮翰 飛觴 往年を憶う。

長谷川流石：明治二十一年（一八八八）生、昭和三十三年（一九五八）没。愛知の人。名は鉞、字は子弘、号を流石・

不律道人などと称し、日本銀行に勤める傍ら書を大島君川に学び、不律会を主宰して活躍し、金石学・

文字学・漢詩等にも通じた書家。

陪する：沿う。添える。そばに並んで供をする。

彷彿：ある物を思い出させるほど、よく似ているさま。

刼：慌ただし。

世態：世の中のあるさま・状態。世情。

揮翰：筆をふるう。文字を書いたり詩文を作ったりすること。

## 祝驥翁笠寺碑竣成

遍路遺留笠。

遍路 遺留の笠。

題詩字字安。

題詩 字々安し。

騁懷千里客。

懷を騁（は）す 千里の客。

# 書勢自蹣跚。

書勢 自ら蹣跚。

驥翁…川村驥山。明治十五年五月二十日〜昭和四十四年四月六日。静岡県出身。本名は慎一郎。別号に醉仏居士、醉驥。父東江に、のち太田竹城に学ぶ。戦前は書道作振会、東方書道会などに所属。戦後は日展に出品。昭和二十三年から同展の審査員を務める。鍾繇風の楷書や懷素風の草書、狂草に独特の趣きがあった。二十六年芸術院賞。三十七年芸術院会員。  
驥山が四国巡礼の際、今治で織田子青に呼び止められ、南光坊に遍路笠奉納となり、笠寺碑が建立された。南光坊には後に織田子青・芳翠先生の碑も建立された。  
蹣跚…道幅いっぱいにわだかまるさま。よろけるさま。

## 奇遇隔四十餘年邂逅金泥正氣歌

奇遇、四十余年を隔てて金泥正氣歌に邂逅す。

今看舊作事何奇。

今 旧作を見る事 何ぞ奇。

四十星霜一夢馳。

四十星霜 一夢 馳す。

兩度災殃有神助。

兩度の災殃 神助 有り。

燦然金色照書帷。

燦然たる金色 書帷を照す。

邂逅…思いがけなく出会うこと。また、思いがけない出会い。巡り会い。

星霜…年月。歲月。

災殃…災い。災難。

燦然…きらきらと美しく光る様子。鮮やかに光り輝く様子。煌びやかな様子。

書帷…書斎のとばり(垂れ布)。

## 追慕服部擔風先生遺徳

服部擔風先生の遺徳を追慕す。

揮翰揺嶽千秋業。

揮翰 揺嶽 千秋の業。

扛鼎凌滄萬古尊。

扛鼎 凌滄 万古 尊し。

燦燦先生文教徳。

燦々たり先生 文教の徳。

優游九十八乾坤。

優游 九十八乾坤。

服部擔風：慶応三年（一八六七）～昭和三十九年。愛知の海西郡鰐浦（弥富町）に生まれ、幼名を桑之丞名は轍、字は子雲と言った。詩・書を善くして清詩を宗とし、柳城吟社・雅声社を開いて作詩の指導に貢献し、日本芸術院賞を受賞した。勲四等瑞宝章受賞。

揮翰：筆を揮う。文字を書いたり詩文を作ったりすること。

嶽：高い山にも似た尊敬すべきもの。

## 次翠川君見寄韵

翠川君見寄の韻に次す。

無端今夜聽風鈴。

端無く今夜 風鈴を聴く。

懷騁當時尚壯齡。

懷は騁す当時 尚壯齡。

擲筆同傾杯裡月。

筆を擲（なぐ）って 同じく傾く 杯裡の月。

清光滿座淨心靈。

清光 滿座 心靈 淨し。

## 寶家招飲席上次鐵甕先生見似韻

宝家招飲席上鉄甕先生の似（しめ）された韻に次す。

醒來自愧醉中謡。

醒め来って 自ら愧（は）ず 酔中の謡。

只喜天真遶筆飄。

只 喜ぶ 天真の筆を遶（めぐ）って 飄（ひるがえ）るを。

春及先生如在世。

春及先生 如（も）し世に在さば。

胡盧一笑正風標。

胡盧 一笑 風標を正さん。

胡盧：大声で笑うときの声の形容。

風標：目だった人柄。また、その立派なさま。

〔原韻〕

磐梯歌曲草津謡。壁上讀來光景飄。

即興催詩詩呼墨。行雲流水仰書標。

送吾妻連峯登攀一行 吾妻連峯登攀一行を送る。

緬想騁車天一涯。 緬想 車を騁（はせ）る 天の一涯。

白雲千嶂萬谿奇。 白雲 千嶂 万谿 奇なり。

夢魂猶記曾遊興。 夢魂 猶 記す 曾遊の興。

安臥冷房敲舊詩。 冷房に安臥して旧詩を敲す。

吾妻連峯登攀一行：八月二十三・二十四日に実施された第十三回展役員慰労旅行。芳翠先生は不参加。

緬想：遠方の人を、はるかに思いやる。

一涯：一方の果て。

嶂：峰。衝立のように遮り立つ山。

谿：谷川。谷。また、谷間を流れる川。

夢魂：夢の中の魂。夢の中での思いつめた心。

曾遊：以前に訪れたことがある。かつて来たことがある。

次砂洲君古稀自述韻 砂洲君古稀自述の韻に次す。

榮壽古稀磨硯迎。 榮寿 古稀 硯を磨して迎える。

臨池健腕有餘情。 臨池 健腕 余情有り。

五輪典是和平象。 五輪の典は是 和平の象。

喚起青春須養生。 喚起 青春 生を養うべし。

賀鈴木芳如刀自八秩 鈴木芳如刀自の八秩を賀す。

八十迎春健。 八十春を迎えて健なり。

才華湧似泉。 才華 湧いて 泉に似たり。

文勲兼婦徳。 文勲と婦徳と。

翰墨好因縁。 翰墨の好因縁。

鈴木芳如：明治十七年（一八八四）～昭和四十七年（一九七二）。昭和期の俳人。「鹿火屋」同人で鳴立庵庵主、神林時処人の推挙で十八世を継いだ初の女性庵主である。十七歳のころ自活を考え、写真技師を志したが、鈴木安二と結婚。虎ノ門で文具店オカモトヤ（「書海」の印刷所。）を営み、文具だけでなく印刷機械を入れて事業を拡大し、バレン刷りも習得した。

刀自：中年以上の婦人の名前の下につけて尊敬を表す。

## 游環湖

環湖に遊ぶ。

無復炎塵汚素衣。

復炎塵の素衣を汚す無し。

湖山嘯傲欲忘機。

湖山嘯傲機を忘れんとす。

白雲生處采芝去。

白雲生ずる處采芝去る。

明月上時踏露歸。

明月上る時露を踏んで帰る。

炎塵…暑い日中のほこり。

嘯傲…うそぶいて自由な気持ちになる。世間を超越したさま。

## 祝山口直平翁古稀

山口直平翁の古稀を祝す。

兆民齊仰五輪旂。

兆民齊しく仰ぐ五輪の旂。

朝上麟臺迎古稀。

朝に麟台上って古稀を迎う。

早稻門前紅日耀。

早稻門前紅日耀き。

好文亭下白雲飛。

好文亭下白雲飛ぶ。

山口直平：「早稲田実業学校校友会人物史」によれば、明治二十七年（一八九四）～昭和四十九年（一九七四）。早稲田実業学校第七代校長。半世紀を早実に捧げ、教え子からはチョッペイさんと慕われる。興至れば授業中でも披露した講談は玄人はだし。

兆民…多くの民。万民。

麟台…図書館。

## 月前蝙蝠

非禽又非獸。 禽に非ず 又 獸に非ず。

輕翅翦涼風。 輕翅 涼風を翦(き)る。

小夜翩翩影。 小夜 翩翩の影。

相追入月宮。 相追うて 月宮に入る。

蝙蝠…「こうもり」の別名。

翅…翼。

小夜…夜。「小夜ふけて」。

翩翩…身輕に飛ぶさま。

月宮…月天子の宮殿。 月世界。

## 五輪十絶

『標詩拾遺』では「五輪十絶」ですが、『書海』の昭和四十年の一月号では「五輪十詠」として発表され、同二月号では「推敲の結果の定稿として五輪十詠」が掲載されています。先生がどう推敲されたのかの過程が解るかと思い、それぞれを掲載致しました。

### 五輪十絶 其一 東京大會 (昭和四十年二月号と同じ)

劫後星霜夢倏馳。 劫後 星霜 夢 倏(たちまち)馳す。

皇風洽及五輪旗。 皇風 洽(あま)ねく及ぶ 五輪の旗。

彩交紅綠青黃紫。 彩は交(まじ)わる 紅綠青黃紫。

列國輿望鍾健兒。 列国の輿望 健兒に鍾(あつ)まる。

劫…非常に長い時間。

星霜…年月。

皇風…天皇の徳。

紅綠青黃紫…五輪マークは、単色または五色(左から青・黄・黒・緑・赤)

輿望…世間一般の人から受ける期待。

鍾…固まって集まる。

(昭和四十年一月号)

劫後星霜夢一炊。 劫後 星霜 夢 一炊。

芙蓉高掲五輪旗。 芙蓉 高く掲ぐ 五輪の旗。

赤樺黄緑紺青紫。 赤樺黄緑紺青紫。

列國興望付健兒。 列国の興望 健兒に付す。

一炊…一炊の夢。 人生の栄枯盛衰のはかないことのたとえ。

一炊の夢。 黄粱一炊の夢。 盧生の夢。 邯鄲の枕。

《語源》唐代、中国の趙の都邯鄲で、盧生という男が呂翁という老人から枕を借りて茶店で一眠りした。すると、自分がたくさんのお金と高い地位を得て、一生を終える夢を見た。目が覚めてみると寝る前に炊いていた黄粱がまだ煮え終わらないくらいの短い時間であったということを知る。盧生は、このことから人生のはかなさを悟ったことから、この語ができた。〔沈既濟『枕中記』〕

芙蓉…富士山。

## 五輪十絶 其二 街観一新

新道縦横高下通。 新道は縦横 高下(高架)に通じ。

快車送客疾如風。 快車 客を送って 疾きこと風の如し。

更看層閣競輪奐。 更に看る 層閣の輪奐を競うを。

畫棟摩天疑月宮。 画棟 天を摩して 月宮かと疑う。

輪奐…建物が大きく美しいさま。

画棟…彩色を施した棟木。

月宮…月の都にあるという想像上の宮殿。

(昭和四十年一月号)

大道新通西又東。 大道 新たに通ず 西また東。

縦横高下帝都中。 縦横 高下 帝都の中。

縫間點綴誇輪奐。 間を縫って点綴 輪奐を誇る。

巨閣摩天疑月宮。 巨閣 天を摩して 月宮かと疑う。

帝都…東京。 皇居のある都会。 皇都。 京師。



点綴…ものがほどよく散らばっていて全体が調和していること。  
巨閣…大きく高く造った建物。

（昭和四十年二月号）

大道新通西復東。大道新たに通ず 西復（ま）た東。

縦横高下帝都中。縦横 高下 帝都の中。

更看層閣競輪奐。更に看る 層閣の輪奐を競うを。

畫棟摩天疑月宮。画棟 天を摩して 月宮かと疑う。

### 五輪十絶 其三 聖火繼送

（昭和四十年二月号と同じ）

群雄共勵練心門。群雄 共に励む 練心の門。

黑白相親選手邨。黑白 相親しむ 選手村。

聖火迢迢馳萬里。聖火 迢々 万里を馳せ。

和平氣象滿乾坤。和平の氣象 乾坤に満つ。

繼送…リレー

迢々…遙かに遠いさま。

氣象…様子。

（昭和四十年一月号）

少長共勵練心門。少長 共に励む 練心の門。

黑白相親選手村。黑白 相親しむ 選手村。

聖火迢迢三萬里。聖火 迢々 三万里。

和平氣象滿乾坤。和平の氣象 乾坤に満つ。

少長…老いも若きも。

三万里…『第十八回オリンピック競技大会公式報告書（上）』によれば、古代オリンピック発祥の地、ギリシヤのオリンピックから採った火をトーチ・リレーによってオリンピック会場へ運ぶ「聖火リレー」は、カ

ール・ディウムの発案により、一九三六年ベルリン大会から始められた。一九六四年東京大会の聖火は、同年八月二十一日にオリンピックアで採火され、アジア地域十二カ国を経て九月七日に沖縄へ到着。鹿児島、宮崎、千歳へ空輸され、九月九、十日にスタート、日本全国を四コースに分かれてリレーし、十月七、九日に東京都庁に到着した。都知事室に安置された聖火は十月九日夜、皇居二重橋前で行われた集火式で合火され、翌朝の十月十日開会式当日、国立競技場へリレーし、聖火台に点火された。

【海外リレー】空輸総距離Ⅱ一五五〇八キロメートル、地上リレー総距離Ⅱ七三二キロメートル

【国内リレー】空輸総距離Ⅱ二六九二キロメートル、地上リレー総距離Ⅱ六七五五キロメートル

## 五輪十絶 其四 入場式典

旌旗肅肅歩堂堂。

旌旗 肅々 歩み堂々。

四海精英來入場。

四海の精英 来って入場。

聖火乍燃人盡仰。

聖火 乍ち燃えて 人尽く仰ぐ。

碧空鮮畫五輪章。

碧空 鮮かに画く 五輪の章。

旌旗…旗。旗印。

鮮画五輪章…一九六四年十月十日の開会式で国立競技場上空に飛行チーム「ブルーインパルス」によつて描かれた五輪マーク。

（昭和四十年一月号）

旌旗肅肅陣堂堂。

旌旗 肅々 陣堂々。

世界精英來入場。

世界の精英 来って入場。

聖火乍燃人盡仰。

聖火 乍(たちま)ち燃えて 人 尽く仰ぐ。

碧空鮮畫五輪章。

碧空 鮮かに画く 五輪の章。

（昭和四十年二月号）

旌旗肅肅歩堂堂。

旌旗 肅々 歩は堂々。

世界精英來入場。

世界の精英 来って場に入る。

聖火乍燃人盡仰。

聖火 乍(たちま)ち燃えて 人 尽く仰ぐ。

碧空鮮畫五輪章。

碧空 鮮かに画く 五輪の章。

## 五輪十絶 其五 宇宙放送

(昭和四十年二月号と同じ)

月宮之畔客星光。

月宮の畔 客星光(かがや)き。

繼送電波通八荒。

電波を繼送して 八荒に通ず。

勝敗機微刹那興。

勝敗の機微 刹那の興。

邊陲民衆喚呼望。

辺陲の民衆 喚呼して望む。

客星…いつもは出ていなくて、時に臨んであらわれる星。

八荒…全世界。

機微…表面からはわかりにくい、微妙なおもむき・事情。

刹那…極めて短い時間。一瞬。

辺陲…中央から遠く離れた地方。片田舎。

喚呼…大声でわめき叫ぶこと。また、その声。

(昭和四十年一月号)

月宮之畔客星光。

月宮の畔 客星光(かがや)き。

中繼電波通八荒。

電波を中繼して 八荒に通ず。

勝敗機微刹那興。

勝敗の機微 刹那の興。

萬國民衆喚呼望。

万国の民衆 喚呼して望む。

## 五輪十絶 其六 亜牛子頌

(昭和四十年二月号と同じ)

陸上水中還馬前。

陸上 水中 還(また)馬前。

生來特技自超然。

生來の特技 自ら超然。

長駟百里有餘力。

長駟 百里 余力有り。

瞠目訝看韋駄天。

瞠目 訝(いぶか)り看る 韋駄天かと。

亜牛…アベベ・ビキラ (Abebe Bikila 1932年八月七日～一九七三年十月二十五日) は、エチオピア出身の

陸上競技(長距離走)選手で、オリンピックのマラソン種目で史上初の二大会連続優勝を果たし、二個の

金メダルを獲得した。オロモ人である。終始はだしで走ったので、〈はだしの王様〉といわれた。東京オリンピックでは二時間十二分十一秒二の世界最高記録で金メダルを獲得した。近代オリンピック史上、マラソンの種目で二連覇はアベベが初めての快挙であった。

超然…ある範囲をぬけ出ているようす。

長駟…マラソン。

瞠目…目をみはる。

韋駄天…仏法の守護神で、足の速い神。

（昭和四十年一月号）

陸上水中還馬前。 陸上 水中 還(ま)た馬前。

生來特技自超然。 生來の特技 自ら超然。

長駟百里有餘力。 長駟 百里 余力有り。

瞠目亞牛韋駄天。 瞠目す 亞牛(アベベ)の韋駄天に。

## 五輪十絶 其七 日紡優勝

呼成魔女非偶然。 呼んで魔女と成す 偶然に非ず。

連破強豪阻雪冤。 強豪を連破して 雪冤を阻(はば)む。

敵陣豈無嘗膽計。 敵陣 豈に 嘗膽の計 無からんや。

偉哉撫子大和魂。 偉なる哉 撫子 大和魂。

雪冤…無実の罪をはらすこと。身の潔白を明らかにすること。

嘗膽…賞嘆。感心して、誉め讃える。

撫子…大和撫子、日本人女性を可憐で繊細だが心は強いナデシコの花に見立てて言う美称。

（昭和四十年一月号）

異名魔女不空言。 異名 魔女 空言にあらず。

連破強剛阻雪冤。 強豪を連破して 雪冤を阻(はば)む。

敵陣豈無嘗膽計。 敵陣 豈に 嘗膽の計 無からんや。

偉哉撫子大和魂。 偉なる哉 撫子 大和魂。

(昭和四十年二月号)

呼成魔女不空言。呼んで魔女となす 空言ならず。

連破強剛阻雪冤。連(しき)りに強豪を破つて 雪冤を阻(は)む。

敵陣豈無嘗膽計。敵陣 豈に 嘗膽の計なからんや。

偉哉撫子大和魂。偉なる哉 撫子 大和魂。

### 五輪十絶 其八 女子体操 (昭和四十年二月号と同じ)

立如白鷺坐如花。立てば白鷺の如く 坐れば花の如し。

燕舞鸞翔對落霞。燕舞 鸞翔 落霞に對す。

世紀佳人和音律。世紀の佳人 音律に和し。

技心一體極精華。技心 一体 精華を極む。

燕舞…「鸞翔鳳集」を踏まえ、素早い動きを表現するため「鳳」を「燕」に推敲されたと推測します。  
落霞…夕焼け。

(昭和四十年一月号)

立如白鷺坐如花。立てば白鷺の如く 坐れば花の如し。

鳳舞鸞翔對落霞。鳳舞 鸞翔 落霞に對す。

世紀佳人傾蘊蓄。世紀の佳人 蘊蓄を傾け。

公開秘技思邪無。秘技を公開して 思ひ邪(よこしま)無し。

鳳舞鸞翔…鸞翔鳳集。すぐれた才能をもった人が集まり来るたとえ。

《語源》「鸞」は鳳凰に似ている伝説の靈鳥。「鳳」は伝説の靈鳥の鳳凰。賢者や英雄などのすぐれた人を「鸞」と「鳳」にたとえもので、それらが飛来するという意味から。＜傳咸『申壞賦』＞

思邪無…思無邪。素直な心。

《語源》『論語』為政篇に「子曰。詩三百。一言以蔽之。曰思無邪。」(子曰く、詩三百、一言以て之を蔽おへば、曰く、思ひ邪(よこしま)無し。)とあり、「詩経には、三百以上の詩があるが、その詩に書かれていることは一つの言葉でくくることができる。それは、『よこしまでない、まっすぐな気持

ち。』ということである」の意。また、『詩経』魯頌に「思無邪 思馬斯徂」(思い邪無し、馬の斯(こ)に徂(ゆ)くを思う)と載っていて「馬飼がひたすらに馬を育てて、馬が立派に歩けるようになることを願う」ことの意。

## 五輪十絶 其九 男子体操

(昭和四十年二月号と同じ)

跳馬平行又吊輪。

跳馬 平行 又吊輪。

黄花薰處躍秋旻。

黄花 薰ずる処 秋旻に躍る。

動中有靜靜中動。

動中 静あり 静中動。

妙技入神方絶倫。

妙技 神に入つて 方に絶倫。

平行…平行棒

秋旻…秋の空。

(昭和四十年一月号)

跳馬平行又吊輪。

跳馬 平行 又吊輪。

黄花薰處躍秋旻。

黄花 薰ずる処 秋旻に躍る。

動中有靜靜中動。

動中 静あり 静中動。

妙技盪胸眞絶倫。

妙技 胸を盪(うご)かして 真に絶倫。

## 五輪十絶 其十 祭典有終

(昭和四十年二月号と同じ)

役盡文明科學精。

役し尽す 文明科学の精。

空前祭典兆民驚。

空前の祭典 兆民驚く。

和親尤是五輪徳。

和親 尤も是れ 五輪の徳。

總意傾來資太平。

總意 傾け来つて 太平に資す。

兆民…多くの民。万民。

（昭和四十年一月号）

役盡文明科學精。役し尽す 文明科学の精。

空前祭典兆民驚。空前の祭典 兆民驚く。

和親最是五輪徳。和親 最も是れ 五輪の徳。

傾總意將資太平。總意を傾け將つて 太平に資す。

蝶如先生曰。絶句十首。平平叙來。其意通串。渾是人所欲言。能用韵語。叙寫無餘蘊。

蝶如先生曰く、絶句十首、平々叙し來つて、其意通串、渾（すべ）て是れ人の言わんと欲する所、能く韵語を用い、叙し写して余蘊無し。

蝶如先生…富長蝶如。明治二十八年九月一日〜昭和六十三年十二月三十一日。本名は静丸、号は覺静・蝶如。服部担風の弟子。著書に『服部担風先生雜記』がある。

余蘊…余り。残余。

## 乙巳元旦 昭和四十年

五輪事去轉蕭條。五輪 事去つて 転（うた）た蕭条。

散策沙邊迎歲朝。沙辺を散策して 歳朝を迎う。

鳥迹似憂文運萎。鳥迹 憂うるに似たり 文運 萎（なえ）るを。

回瀾既倒路迢迢。回瀾 既倒 路 迢々。

転…ますます。いよいよ。いつそう。

蕭条…ひっそりとして物淋しい様子。

萎…氣力が衰えてぐったりする。

回瀾…渦巻く波。逆巻く波。

既倒…すでにたおれている。

迢々…はるかに遠いさま。

## 竹堂兄胸像除幕式

書宗壽像嶽蓮前。

書宗の寿像 嶽蓮の前。

結得松風水月縁。

結び得たり 松風水月の縁。

載筆來過問津客。

筆を載せて来たり過ぎる 問津の客。

游絲不斷永連綿。

游絲は断えず 永く連綿。

高塚竹堂：明治二十二年（一八八九）～昭和四十三年（一九六八） 有渡郡不二見村（現在の清水市）に生まれる。名は錠二。小学校で教鞭をとった後、上京して保険会社に勤務のかたわら、小野鷲堂に学び、上代様の仮名を研究する。東方書道会、日展等の審査員を歴任し、台湾で使用した国定教科書「書き方」の筆者にも選ばれている。戦時中、翼賛書道連盟の創立に伴い、事務局長として手腕をふるう。その後、毎日展特別招待作家、日本書道会の副理事長を務めるかたわら、笹舟会会長として多くの門人を養成している。昭和四十二年に勲四等旭日章を受章。銅像は静岡県清水市鉄舟寺にある。

鉄舟寺：飛鳥時代藤原氏の出身である久能忠仁が久能山東照宮付近に建立した堂に始まり、その後奈良時代の僧行基が来山して久能寺と号したという（『久能寺縁起』）。平安時代に入って天台宗に改められ、建徳寺と駿河を二分する勢いで栄えた。一五七〇年（永禄十三年）武田信玄が久能山に城を作るため現在地に移され、宗旨も変わり新義真言宗（真言宗根来派）に属することになる。江戸時代には朱印寺領として二百石余りを与えられ、多くの支坊を有したが、江戸時代後期あたりから衰退し、明治に入ると無住になって寺は荒廃してしまった。その後、旧幕臣で明治以降に静岡藩権大参事も務めたこともある山岡鉄舟が、臨済寺から今川貞山を招いて復興し、寺号も鉄舟寺と改められた。そのため鉄舟の書跡の遺品も多い。

嶽蓮：蓮嶽。富士山。

松風水月：王羲之「蘭亭序」の一節。

問津：『論語』微子に、孔子が旅の途中子路をやって、農耕していた人に渡し場を問わせた。問われた長沮・桀溺は共に隠者で、孔子は何でも知っているだろうからといって教えなかった。という故事があり、転じて、学問を修めるための方法を尋ねる。また、人にものを尋ねる。

游絲：游糸。春秋の暖かい日などに、空中移動するためにクモが吹き上げる糸。

連綿：絶えずに長くつづくさま。

## 祝琢社十五周年

琢社十五周年を祝す。

物換星移劫後天。

物換（かわ）り 星移る 劫後の天。

沙邊鳥跡澹如烟。

沙辺の鳥迹 澹（あわ）くして烟の如し。

誰能隻手支狂瀾。

誰か能く 隻手 狂瀾を支（ささ）える。



# 琢社飛文十五年。

琢社 飛文 十五年。

劫…極めて長い時間。

沙辺…砂浜。

隻手…片手。人をたよらず、自分だけで行うことをあらわすこともある。

狂瀾…荒れくるう大波。

飛文…根拠のないことを記した文書。

## 偶拈 博鶴歩君粲

偶拈 鶴歩君の粲を博す。

法曹忙裡究幽玄。

法曹 忙裡 幽玄を究め。

書伯閑中染雪箋。

書伯 閑中 雪箋を染む。

賢弟愚兄同誕生日。

賢弟 愚兄 誕生日を同じくし。

共論黑白亦奇縁。

共に黑白を論ず 亦 奇縁。

法曹…司法官や弁護士など、広く司法のことに携わる者。

忙裡…忙しい時。忙しくしているうち。

幽玄…奥深く味わい深い。

書伯…書家。画伯を振ったと思われる。

閑中…暇で、用事がないとき。

雪箋…真白な画仙紙。

## 野中鳴雪君退職有詩次韻以呈

野中鳴雪君退職詩有次韻以て呈す。

善哉完職賦歸田。

善い哉 職を完うして 帰田を賦す。

雪月風流不用錢。

雪月風流 錢を用いず。

塵外潛心觀道妙。

塵外 心を潜めて 道の妙を観る。

筆端三絶自超然。

筆端 三絶 自ら超然。

野中鳴雪…静岡の人で、名は敏、通称は藤平、字は子求、号を鳴雪と称し、初め小野鷲堂流を学び、次いで長

谷川流石に師事し、毎日書道展審査会員等を務めた。

帰田…役人をやめて故郷に帰って農事に従う。

三絶…詩・書・画に秀でて並ぶものがないこと。また、そのような人。

超然…物事にこだわらないようす。俗事にとらわれない様子。

## 翠苑書塾十五周年次韻以祝

翠苑書塾十五周年次韻以て祝す。

舞袖相繆亦是縁。

舞袖 相い繆(まとう)も 亦た是れ縁。

締盟師弟幾年年。

締盟 師弟 幾年々。

知新千載臨池道。

知新 千歳 臨池の道。

温故須參古聖賢。

温故須らく参ずべし 古聖賢。

曾根翠苑先生…大正十二年(一九二三)八月十一日(平成十二年(二〇〇〇)七月十八日。墨田区本所に生まれる。

昭和十八年二月に二十一歳で浄土真宗本願寺派本願寺において得度、二十七年七月に本願寺派教師に任命され、同年九月に覺童山誓招寺の住職となる。昭和二十五年三月、二十五歳で松本芳翠先生に入門。

昭和二十七年五月には第一回書海杜展に委員として出品、昭和三十四年に日展に初入選を果たした。その間に慈芳書道會を創立した。昭和四十年には書海杜展審査員、四十一年に東方書道院同人推挙、四十七年に(財)書海杜理事、五十四年に墨田区書道連盟理事長、五十八年に墨田区文化連盟理事長、平成元年二月讀賣書法會理事、第六回展審査員となり、また日本書道教育會議役員として成田山全国競書大会の中央審査員として尽力した。平成九年十二月、芳翠先生二十七回忌を期して書海杜同人會を再興し、幹事長に推され、平成十一年八月の書海誌発刊九百号の祝賀行事を成功に導くなど、先生の功績は永く書海杜の歴史に銘記される。

締盟…同盟・条約を結ぶこと。

温故知新…前に学んだことや古いことばをもう一度よみがえらせて、新しい真理をさること。『論語』為政に「温故而知新、可以為師矣(故きを温めて新しきを知れば、以て師為るべし)」とある。

千歳…非常に長い年月。

聖賢…非常に長い年月。

## 祝筆之友達七百號

筆の友 七百号に達するを祝す。

筆端龍帛競。

筆端 竜帛 競い。

誌上起雲煙。

誌上 雲煙を起す。

徵逐人何處。

徵逐 人何れの処ぞ。

# 刊成七百篇。

刊し成す 七百篇。

筆の友書道会：松岡雲峰は明治四十四年、越知町横畠に生まれ、戦後、高知大学などで書道を教える一方、書道振興と書写教育推進を目指して活動する書道団体・筆の友書道会を立ち上げ、県内の書道普及に大きな功績を残した。昭和五十八年には県文化賞を受けている。

筆端：筆さき。

竜席：互いに勝り劣りのない、すぐれた力量を持つ二人の英雄・豪傑。

雲煙：書画のあざやかな墨色。

徴逐：招いたり、招かれたりして、行き来する。

## 聞三浦邸町名變而作若宮

聞く三浦邸町名変じて若宮と作る。

## 多年温故野方翁。

多年 温故 野方翁。

## 忘老知新入若宮。

忘老 知新 若宮に入る。

## 欣賞鎌倉三代記。

欣賞す 鎌倉三代記。

## 時姫孝養義村忠。

時姫の孝養 義村の忠。

鎌倉三代記：浄瑠璃。時代物。十段。作者未詳。天明元年（一七八一）江戸肥前座初演。大坂夏の陣の悲劇を鎌倉時代に置き換えて脚色したもので、北条時政は徳川家康、佐々木高綱は真田幸村、三浦之助義村は木村重成、時姫は千姫を表している。近松半二ら作の『近江源氏先陣館』の続編と考えられる。

時姫：『鎌倉三代記』に登場する姫で、親の北条時政を討たなければ婚約者である三浦之助と結婚できないという、恋と親への情の板挟みに苦しむ悲劇的な役。千姫がモデル。北条時政の娘。父の敵である三浦之助のためならすべてを尽くす情熱的な性格である。数多い姫の中でも難役で、『本朝廿四孝』の八重垣姫、『祇園祭礼信仰記』の雪姫と合わせて「三姫」と呼ばれている。父と恋人との板挟みになる時姫の苦悩が中心テーマである。時姫は八重垣姫、雪姫とともに三姫といわれる大役で、愛らしさと気品と強さが要求される。

孝養：親に孝行をすること。亡き親の後世をねんごろに弔うこと。また、亡き人の後世を弔うこと。  
義村：三浦之助義村。鎌倉時代初期の相模国の武将。鎌倉幕府の有力御家人。桓武平氏良文流三浦氏の当主・三浦義澄の次男（嫡男）。木村重成がモデル。美貌で勇敢な若武者。時政との戦いに負傷するが、時姫が自身に恋している事を利用して佐々木高綱とともに時政暗殺を謀る。

若宮口の戦場より一文字にとつて返す心は更におくれねど  
若し落人と人や三浦が孝行の念力通ず母の軒……………

疊韻以酬

疊韻以て酬ゆ。

俗客誰能識兩翁。

俗客誰か能く 両翁を識らん。

樗盒埜苑本仙宮。

樗盒野苑 本に仙宮。

欲傳和漢往來韻。

和漢往來の韻を伝えんと欲せば。

須托迷途飛脚忠。

迷途 飛脚の忠に托すべし。

浴客…ふる屋・温泉宿などに入浴に来る客。

迷途…執着しこたわるもののある迷いの境地。三界・六道のこと。

## 祝高見敦夫春田昭子兩君華燭典

高見敦夫春田昭子兩君の華燭の典を祝す。

高堂見華燭。

高堂 華燭を見る。

敦穆滿和風。

敦穆 和風満つ。

春水沾田野。

春水 田野を沾(うるお)し。

昭乎仰歲豐。

昭乎として 歲豐を仰ぐ。

高堂…相手の家やその家人を尊敬するという語。貴家。尊家。

華燭…結婚の席にともす灯火。転じて、結婚式。

敦穆…ほんのりとして奥ゆかしいさま。穏やかで美しいさま。静かなさま。威儀正しく恭しいさま。

昭乎…明らかなさま。

歲豐…豊作。

## 觀野馬追祭

野馬追祭を觀る。

一聲霹靂競先鞭。

一声 霹靂 先鞭を競う。

雲雀原頭騎百千。

雲雀原頭 騎百千。

螺響呼醒少年夢。

螺響き呼び醒ます 少年の夢。

# 傳家鎧甲觸鏘然。

伝家の鎧甲 觸(ふ)れて鏘然。

野馬追祭：昭和四十年七月十八日、芳翠先生は大内枝翠先生・野内鶴齋先生らと相馬馬追祭りを見物。芳翠先生は甲冑を身に着けられ記念写真撮影された。

霹靂：激しい音。

先鞭：人より先に馬に鞭をあてて、功名を立てようとする。人より先に物事をはじめること。

雲雀：ひばり。

原頭：野原の近く・ほとり。また、野原。

螺：法螺貝(ほらがい)の先に口をつけ吹き鳴らすようにしたもの。山伏の法具として尊重され、戦陣での合図にも用いられた。

鏘然：金属や玉がさわやかに鳴る音の形容。

## 戲著甲冑自題其像

戯れに甲冑を著け自ら其像に題す。

紫鎧金兜守硯池。

紫鎧 金兜 硯池を守る。

樗翁七十凜雄姿。

樗翁七十 雄姿 凜たり。

碧天翻墨雁行亂。

碧天 墨を翻(ひるがえ)して 雁行 乱れる。

欲掃千軍筆一枝。

千軍を掃わんと欲す 筆 一枝。

## 祝春海翁米壽

春海翁の米寿を祝す。

八十八年壯若春。

八十八年 壯春の若(ごと)く。

壽康筆力共超倫。

壽康 筆力 共に絶倫。

龍跳虎嘯天門外。

竜跳虎嘯 天門の外。

横掃千軍獨養眞。

横掃千軍 独り眞を養う。

豊道春海：明治十一年(一八七八)九月一日〜昭和四十五年(一九七〇)九月二十六日。大正から昭和に活躍した天台宗の僧、書家。幼名は川上 寅吉、得度後の僧名は慶中。別号に竜溪、谷門道人、天門海翁がある。栃木県佐久山町(現大田原市)の出身。

壽康：長生きで健康なこと。

天門：天地の万物が生ずるという門戸。

祝前宰相吉田茂閣下米壽

前宰相吉田茂閣下の米寿を祝す。

時艱冠冕布經綸。

時艱にして冠冕 經綸を布く。

宰執之餘拂硯塵。

宰執の余 硯塵を払う。

八十八齡猶矍鑠。

八十八齡 猶お矍鑠。

優游翰墨自清真。

優游 翰墨 自ら清真。

冠冕…官に仕え役人となること。また、なった人。

經綸…広く国家を統括し治めてゆくこと。

宰執…政治上の最高の責任を持つ者。

矍鑠…年老いても、健康で元気のいいようす。年をとっても身心ともにしっかりしているようす。

優游…なごやかなこと。のびやかにひまのあること。

清真…汚れない。

## 日野家追薦筵

展墓今宵招有縁。

展墓 今宵 有縁を招く。

三絃淨響奠靈前。

三絃の淨響 靈前に奠（そなえ）る。

曲中曲外人情美。

曲中曲外 人情の美。

上動皇天下九泉。

上は皇天を動かし 下は九泉。

展墓…墓参りをする。墓参。

有縁…仏の道に縁のあること。互いに何らかの関係があること。

三絃…三味線。

皇天…天の神。天帝。上帝。天皇。

九泉…九重の深い地の底。人が死後にいくという地の底にある世界。よみじ。

## 後 凋

松老寒崑上。

松は老ゆ 寒崑の上。

濤聲半夜吟。

濤声 半夜の吟。

風餐還雪虐。

風餐 雪虐 還る。

初識後凋心。

初めて識る 後凋の心

後凋…『論語』子罕に「歳寒、然後知松柏之後彫也(歳寒くして、然る後松柏の凋(しぼ)むに後(おく)るるを知るなり)」とあり、危難の時にはじめて人の真価がわかるものである、困難にたえて固く節操を守るこの意。

崑…巖。

涛声…うねりの音。

風餐…風餐露宿。風にさらされながら食事をし、露にあたりながら宿る。旅の苦しみをいう。

雪虐…雪に苦しめられる。大雪の災害。

祝古稀子青詩碑竣工

古稀子青詩碑竣工を祝す。

豊碑新勒海門秋。

豊碑 新に勒す 海門の秋。

點得風懷千古流。

点じ得たり風懷千古の流。

七十健毫留鳥迹。

七十 健毫 鳥迹を留め。

吟魂遠騁石峯頭。

吟魂 遠く騁(は)す 石峯の頭。

織田子青…明治二十九年(昭和五十九年六月。愛媛県周桑郡小松町石根(現西条市)生まれだが、大正十四年以來今治市に在住。書道界の一大組織・書神会を創立した人。雅号に“糸”の“糸青”と草書で書いているうちに“子青”となった。大正八年上京。小学校教師のかたわら童謡も書く。郷里の愛媛県小松町石根小学校に童謡「夏あくび」記念碑建立されている。南光坊に筆塚を建立。書のほか印刻、漢詩、俳句に優れた。

豊碑…功德をほめたたえてたてた大きな石碑。

健毫…文字や文章をじょうずに書くこと。「毫」は、筆。

鳥迹…文字。許慎『説文解字』叙に「黄帝之史倉頡見、鳥獸蹄迹之迹、知分理之可相別異也、初造書契。(蒼頡が鳥の足跡を見て文字をつくることを思いついた)」とある。

吟魂…詩歌をつくりたいと思う気持ち。

伊勢志摩紀行

光號車上

筆硯功成就慰勞。

筆硯功成つて 慰勞に就く。

新車光號笑聲高。

新車 光号 笑声 高し。

欲探海底眞珠祕。

探らんと欲す海底 眞珠の秘。

一曲狂歌氣愈豪。

一曲の狂歌 氣愈いよ豪。

ひかり号から窓際見れば。

富士か佐山か、佐山か富士か。

富士は白雪、佐山は光る。

佐山まぶしや、富士見たや。

伊勢志摩紀行：昭和四十年九月二十六日実施。新幹線で名古屋へ。宇治山田から伊勢志摩スカイラインを通つて賢島の賢島荘に泊。二十七日は眞珠島見学後、名古屋から東京に戻った。

## 同 賢島荘中

紅暎初出暎漣漪。

紅暎 初めて出でて 漣漪に暎ず。

彩染胸中筆一枝。

彩は染む 胸中の筆一枝。

恍訝泛身故郷海。

恍として訝（いぶか）しむ 身の故郷の海に泛（うか）ぶかと。

志摩灣上憶先師。

志摩湾上 先師を憶う。

紅暎…真つ赤な朝日。

漣漪…さざなみ。

訝…うたがわしく思う。不審に思う。あやしむ。

## 同 鳥羽海女

眞珠島下有危礁。

眞珠島下 危礁 有り。

海女描紋破寂寥。

海女 紋を描いて 寂寥を破る。

日暮閑鷗與潮去。

日暮れて閑鷗 潮と共に去る。



蒼波藏玉更蕭條。

蒼波 玉を藏して 更に蕭條。

危礁…海中から突き出て高くそびえたつ岩。

寂寥…侘びしく、物淋しいこと。音もなく、人影もなくひっそりとしているさま。

閑鷗…静かに水に浮んでいるかもめ。

蒼波…あおい波。蒼浪。

蕭条…ひっそりとして物淋しい様子。

## 同 神宮参拝

大廟寶前天日光。

大廟 宝前 天日光(かがや)き。

参宮橋畔翠嵐香。

参宮 橋畔 翠嵐 香ばし。

澄心一掬鈴川水。

澄心 一掬 鈴川の水。

古墨輕磨幽韻長。

古墨 輕磨すれば 幽韻 長からん。

大廟…伊勢大神宮。

天日…太陽。日輪。

参宮…伊勢神宮に参拝すること。

翠嵐…青々とした山にかかった靄。

澄心…心をすます。心を落ち着かせて静かにする。静かに澄んだ心。

一掬…両手で水を一掬いすること。一掬い。

鈴川…五十鈴川。伊勢市南部に源を発し北流。伊勢市街を流れ、伊勢湾に注ぐ。倭姫命が御裳のすその汚れを

濯いだという伝説があり、御裳濯川の異名を持つ。古くから清流とされ、和歌にも多く歌われた。神路

山を源流とし、支流島路川と合流、皇大神宮(伊勢神宮内宮)の西端を流れており、御手洗場が作られて  
いる。

幽韻…奥深く何ともいえない趣。

## 瀬戸内海國立公園櫻井海岸

菅公祠畔老青松。

菅公の祠畔 青松 老い。

十里沙汀瑞色濃。

十里 沙汀 瑞色 濃やかなり。

潮去潮來鷗亂舞。

潮去り潮来つて 鷗 乱れ舞う。

# 舟人遙指石鑪峯。

舟人遙かに指さす 石鑪の峯。

菅公…菅原道真。承和十二年六月二十五日(八四五)延喜三年二月二十五日(九〇三)。日本の平安時代の貴族、学者、漢詩人、政治家。参議・菅原是善の三男。官位は従二位・右大臣。贈正一位・太政大臣。忠臣として名高く、宇多天皇に重用されて寛平の治を支えた一人であり、醍醐朝では右大臣にまで昇った。しかし、左大臣藤原時平に讒訴され、大宰府へ権帥として左遷され現地で没した。死後天変地異が多発したことから、朝廷に祟りをなしたとされ、天満天神として信仰の対象となる。現在は学問の神として親しまれる。

祠…神を祀った小さい社。

沙汀…砂浜。

石鑪…尖った鎗のような岩。

## 黒塚

巨巖怪石亂横斜。

巨巖怪石 乱れて横斜。

縫隙老根奔似蛇。

隙を縫って老根 奔(はし)って蛇に似たり。

八百年前栖悪鬼。

八百年前 悪鬼 栖む。

於今碧血染泥沙。

今に於て碧血 泥沙を染む。

日展入選者懇親旅行…恒例の旅行が十一月十四日に福島県岳温泉で催された。日野屋別館光雲閣に泊まり、翌日は二本松城趾・二本松少年隊墓所・曹洞宗大隣寺・黒塚の遺跡などを見学した。

黒塚…今もなお、謡曲や浄瑠璃、歌舞伎などで語りつがれる「安達ヶ原・黒塚」の鬼婆伝説。その舞台となったのが、阿武隈川のほとりに天台宗・真弓山観世寺がある。

神亀3年(726、奈良時代)、鬼婆を退治した那智東光坊の僧、祐慶阿闍梨の開基と伝えられ、境内には鬼婆が棲んでいたという笠石や夜泣き石、安堵石などの巨岩が散乱し、血なまぐさい鬼女伝説の面影がしのばれる。出刃包丁を洗った血の池などが、今なお残っています。近くの老杉のねもとに、鬼婆を埋めたという円形の塚「黒塚」があり、傍らに

みちのくの 安達ヶ原の黒塚に 鬼こもれりと 聞くはまことか

と刻まれた平安時代中期の歌人・平兼盛(生年未詳く九九〇)の歌碑がある。

碧血…忠誠心の表れという言葉。『莊子』外物に、「君主はその臣下が忠誠である事を誰でも望んでいるのだが、臣下が忠誠であっても何時も君主に信用されるとは限らない。だから伍員(呉王の忠臣)は王に殺され死体を河に流され、荑弘(周の賢臣)は疑われ蜀の地に流されて死に、その血は三年後に碧色の玉となった。」とある。

泥沙…泥と砂。

弔二本松少年隊墓 二本松少年隊の墓を弔う。

霞城松翠外。 霞城 松翠の外。

憑弔少年心。 憑弔す 少年の心。

墨妙高泉筆。 墨妙 高泉の筆。

仰看同正襟。 仰ぎ見て 同じく襟を正す。

二本松少年隊：幕末の二本松藩において戊辰戦争に出陣した十二歳から十七歳の少年兵部隊。戊辰戦争への出陣は十二歳や十三歳では不可能なのだが、二本松藩には危急の際には年齢を二歳加算すると言う「入れ年」の制度があり、最少年齢の隊士の年齢は十二歳となっていました。二本松少年隊は藩内各地に出陣した六十二名を指すが、藩の高島流砲術師範の木村銃太郎指揮下の二十五名が特に有名で、大壇口での戦いにおいて木村をはじめその多くが戦死した。負傷して称念寺に運ばれた者もいたが、やがては息絶えてしまった。これらの出来事は、戊辰戦争における悲劇のひとつとして知られている。

墓は二本松歴代藩主墓のある大燐寺。

憑弔：古跡などに立ち寄って昔を忍ぶ。

高泉：高泉性激。江戸時代初期の能筆家。明国(福州福清県)の生まれで、福州木槧山の慧門如沛に師事し、その法を学び、寛文初年隠元隆奇の招きによって来日し、京都宇治の黄檗山滿福寺に遇する。同五年初代藩主丹羽光重に招請されて来藩、甘露山珊瑚寺を創設した。書家としても著名で中国明の書風を我が国に伝える。藩主菩提所大隣寺の扁額は高泉の筆によるものであり、また同寺には書幅が所蔵されている。元禄五年宇治黄檗山第五世を継ぎ、中興の祖といわれている。

光雲閣上仰旭日 光雲閣上旭日を仰ぐ。

檻前五色彩霞蒸。 檻前 五色 彩霞 蒸し。

雲海微明曉氣澄。 雲海 微に明かに 曉氣 澄む。

阿武連山接天處。 阿武連山 天に接する處。

瞳瞳旭日斬空騰。 瞳々たる旭日 空を斬って騰(あが)る。

檻：手すり。

彩霞：美しい色のかすみ。

曉氣：身も引き締まる感じがする夜明け前の気配。

阿武連山：阿武隈連山。

丙午元旦 昭和四十一年

履端七十有三年。 履端 七十有三年。

同學親朋多列仙。 同学の親朋 多く仙に列す。

試筆蕭齋仰靈嶽。 筆を蕭齋に試みて 靈嶽を仰げば。

玲瓏八朶絶塵縁。 玲瓏 八朶 塵縁を絶つ。

履端…正月元日。

仙…死。

蕭齋…部屋。

唐の李肇の《国史補》に、「梁の武帝が寺を造り、蕭子雲に命じて、飛白体で大書させた「蕭」の字を蔵した。李約がこれを買求め、部屋を建てて「蕭齋」と名付けた。」とある。

靈嶽…神聖であるとされる山。

玲瓏…美しく澄みきっている様子。

八朶…八つに分かれた花卉。

塵縁…世の中の係わり合い。俗世間の煩わしい人間関係。

## 丙午宸題聲

發入宸題何所鳴。 発して宸題に入る 何の鳴る所ぞ。

非雷非瀑況風箏。 雷に非ず瀑に非ず 況んや風箏。

山莊一夜孤燈下。 山莊 一夜 孤燈の下。

落葉窗中讀誦聲。 落葉 窓中 読誦の声

宸題…新年の宮中行事「歌御会始め」に天皇が出す題。勅題。御題。

風箏…空にあげる凧。

讀誦…声を出して経文を読むこと。読経。

## 同 次野方翁韻

松茂竹苞風作聲。

松茂 竹苞 風声を作す。

四時鬱鬱碧雲生。

四時鬱々 碧雲生ず。

一留紫鳳一丹頂。

一は紫鳳を留め 一は丹頂。

別有寒梅春宿鶯。

別に寒梅 春鶯を宿す有り。

碧雲…青く澄んだ雲。

紫鳳…紫色の鳳凰。

### 訪三浦野方翁病

三浦野方翁の病を訪う。

聞道吾兄在病牀。

聞くならく吾兄 病牀に在り。

蕪詩爲寄養生方。

蕪詩為めに寄す 養生の方。

如今橘井春應手。

如今 橘井 春手に応ず。

坐臥平安賦一章。

坐臥平安 一章を賦せよ。

蕪詩…粗末な詩。

橘井…医者。《神仙伝》に漢の蘇仙公が死に臨んで母に遺言し、来年は疫病が流行するが、庭の井戸水と軒端の橘の葉とを用いれば病を治すことができると告げ、果たしてその通りになった。この故事から「橘井」の語ができ、転じて医者のことにもいう。

坐臥…いつも。ふだん。平生。

琴本無絃筆半牀。

琴は本 無絃 筆は半牀。

多年伴侶愜醫方。

多年 伴侶 医方に愜う。

乾坤攝理何玄妙。

乾坤の摂理 何ぞ玄妙。

夢裡推敲詩一章。

夢裡 推敲 詩一章。

半牀…寢床の半分。床の半分。

愜…満足する。快い。

摂理…自然界を支配している理法。

玄妙…道理や技芸などが奥深く微妙なこと。

夢裡…夢のうち。

慕坡野叟在繩牀。

坡を慕う野叟 繩牀に在り。

瑤韻瓊歌傳八方。

瑤(たま)に韻し 瓊(たま)に歌い 八方に伝う。

因病得閑閑則誦。

病に因つて閑を得 閑なれば則ち誦せよ。

人生識字患憂章。

人生 識字 患憂の章。

坡…土を盛つて(型に築いたつつみ。

繩牀…繩床。なわを張つて作った腰かけ。

患憂…憂患。心配と悩み。気がかり。心痛。

## 丙午開歲第一聲以博書壇酒豪番付編成

### 委員諸公一築

丙午開歲第一声以て書壇酒豪番付編成委員諸公の一築を博す。

函山豪興墨地縁。

函山の豪興 墨池の縁。

把酒浩歌驚八仙。

把酒 浩歌 八仙を驚かす。

三十餘年吾亦老。

三十余年 吾亦老いたり。

何人丙午李青蓮。

何人か丙午の 李青蓮。

李青蓮…李白。七〇一年〜七六二年十月二十二日。中国盛唐時代の詩人。字は太白。号は青蓮居士。奔放で変

幻自在な詩風から、後世「詩仙」と称される。

なお芳翠先生を本名で呼び捨てにすることがないように、尊敬の念を著すため「字」か「号」で呼ぶのが通例。例えば蘇軾は東坡先生、杜甫は杜子美など。

悼野中鳴雪君

野中鳴雪君を悼む。

訃音忽到偽耶眞。

訃音 忽ち到る 偽か真か。

自賦歸田纔一春。

歸田を賦してより 纔(わず)かに一春。

雅韻風懷向誰語。

雅韻 風懷 誰に向つて語らん。

空望靈嶽憶斯人。

空しく靈嶽を望んで 斯の人を憶う。

野中鳴雪：明治三十四年～昭和四十一年。静岡の人で、名は敏、通称は藤平、字は子求、号を鳴雪と称し、初め小野鷺堂流を学び、次いで長谷川流石に師事し、昭和初年に戊辰書道会展で最高賞を獲得し、副会頭大倉男爵から三希堂法帖を授与された。また、橋本雲峰と北辰会を興し、会報「北辰」を発行した。後、毎日書道展審査会員等を務めた。

訃音：亡くなった知らせ。

歸田：役人をやめて故郷に帰って農事に従う。

雅韻：風流で上品な趣き。

風懷：風流を愛する気持ち。風流な思い。心に思っていること。心のうち。

書海達五百號有感

書海五百号に達す、感有り。

松翠初萌春日融。

松翠 初めて萌えて 春日 融。

何知虐雪又饗風。

何ぞ知らん虐雪 又 饗風。

刊成五百龍鱗老。

刊成 五百 竜鱗 老いたり。

四十餘年褒貶中。

四十余年 褒貶の中。

松翠…松本芳翠

虐雪…ひどい大雪。

饗風…風饗。強い風。

竜鱗…美しい篆書の形容。

褒貶…ほめることとそしること。

祝鹿島守之助大人古稀

鹿島大人の古稀を祝す。

初接高風丙午春。

初めて高風に接す 丙午の春。

業勲徳壽古稀人。

業勲 徳寿 古稀の人。

凌滄珠玉家尊詠。

凌滄の珠玉 家尊の詠。

翰墨由來有宿因。

翰墨 由来 宿因有り。

鹿島守之助…明治二十九年二月二日～昭和五十年十二月三日。外交官、実業家、政治家、外交史研究家。法学

博士。元鹿島建設会長。元参議院議員。文化功労者。旧姓永富。

古稀…七十歳。杜甫詩・曲江「酒債尋常行處有、人生七十古來。」(酒代のつけは私が普通行く所には、どこにでもある。(しかし) 七十年生きる人は古くから稀である。)に由来する。

高風…高尚な風格。りっぱな人格。

業勲…仕事・職業・学問・技芸などの名誉な手柄・功績。

凌滄…青々と澄みきっているさま。

珠玉…優れているもの、美しいものなどの例え。

家尊…他人の父の尊称。

詠…詩歌を作る。詩歌にして述べる。

宿因…前世からのきまり。

## 鳥迹頌

鳥迹の頌

朝灌詩書圃。

朝に詩書の圃に灌(そそ)ぎ。

夕遊翰墨場。

夕に翰墨場に遊ぶ。

文華因鳥迹。

文華 鳥迹に因る。

千載破天荒。

千載 破天荒。

文華…文明がはなやかで美しいこと。文章が美しいこと。

破天荒…人がまだやらなかったことをやってのけること。

宋の説話集『北夢瑣言』の「唐代、王朝成立から百年以上経た後も、荊州(現在の湖北省)から官吏登用試験である科擧の合格者が出ず、世の人はこの状況を「天荒」と称した。天荒とは本来「未開の地」もしくは「凶作などで雑草の生い茂る様」を言う。やがて劉蛻という人物が荊州から初めて科擧に合格すると、人々は「天荒を破った」と言った。」という故事に由来する。

## 與同人諸公遊覽北陸地方

丙午八月同人諸公と北陸地方を遊覽す。

月暗車窗外。

月は暗し 車窓の外。



群仙憩枕頭。 群仙 枕頭に憩う。

芳醇遠來酒。 芳醇 遠來の酒。

一夢到加州。 一夢 加州に到る。

北陸紀行：第十五回書海社展役員慰勞旅行会。 八月二十七日、夜行列車で金沢へ。二十八日、千里ヶ浜海岸・

妙成寺・能登金剛・兼六園を見学し山中温泉紫水園ホテルへ。二十九日、東尋坊・永平寺など見学後、

米原より新幹線こだまにて帰路につく。なお、この旅行には筆者(松篁)も同行させていただきました。

群仙：多くの仙人。

芳醇：酒などのかおりが高く、味のよいこと。

遠來：はるか遠くからはるばる来る。

加州：「加賀の国」の唐風の呼び名。

## 同 千里濱 千里が浜

車騁能州千里濱。 車は騁す 能州 千里が浜。

長風渡海拂炎塵。 長風 海を渡つて 炎塵を払う。

烟汀沙密不留轍。 烟汀 沙(砂) 密に 轍を留めず。

舉網閑看跳細鱗。 挙網 閑に看る 細鱗の跳るを。

能州：「能登の国」の唐風の呼び名。

炎塵：暑いほこり・塵。

烟汀：霞の中に隠見する水際。

轍：前人のしたこと。先例。

## 同 能登金剛

絶壁遮風峙。 絶壁 風を遮(さえぎ)つて峙(そばだ)ち。

巉崕穿石門。 巉崕 石門を穿(う)が(つ)。

狂濤翻白雪。 狂濤 白雪を翻し。

鞆鞆撼山根。

鞆鞆として 山根を撼(うご)がす。

巉崑…するどく切り立っているけわしい岩山。

穿…間をぬって通り抜ける。

涛…波。大きな波。うねり。

鞆鞆…波や水の流れが勢いよく音をたてるさま。

## 同 金澤兼六園

松偃龍鱗老。

松偃(ふ)して 竜鱗 老い。

林深鳥自還。

林深くして 鳥自ら還る。

樂翁名苑美。

樂翁が 名苑の美。

萃在石泉間。

萃(あつ)めて在り 石泉の間。

金澤兼六園…石川県金沢市にある日本庭園。国の特別名勝であり、日本三名園の一つに数えられる。寛政四年、

治脩は藩校「明倫堂」と「経武館」を創建した。治脩の後を継ぎ十二代藩主となった斉広は、その藩校を移転させ、文政五年(一八二二)、その跡地に自己の隠居所「竹沢御殿」を造営。同年、奥州白河藩主の松平定信が、斉広の依頼によって「兼六園」と命名した。

樂翁…松平定信。江戸時代中期の大名、老中。陸奥白河藩第三代藩主。定綱系久松松平家第九代当主。江戸幕府第八代将軍・徳川吉宗の孫に当たる。

## 同 東尋坊

恠石危崑阨一灣。

恠石 危崑 一湾 阨(ふさが)る。

風磨水蝕兀難攀。

風磨 水蝕 兀(ゴツ)として攀(よ)じ難し。

蒼波欲語白波抹。

蒼波は語らんと欲し 白波は抹す。

因果業僧情話閑。

因果の業僧 情話 閑なり。

東尋坊…地名の由来は、乱暴あるいは恋愛関係で恨みを買ってここから突き落とされた平泉寺(勝山市)の僧の名前による。由来について雄島の大湊神社では以下のような由来を紹介している。

昔、平泉寺には数千人僧侶がいた。その中にいた東尋坊という僧は、怪力を頼りに、民に対して悪事

の限りをつくした。東尋坊が暴れ出すと手がつけられず、誰も彼を押さえることが出来なかった。東尋坊はまさにやりたい放題、好き勝手に悪行を重ねていたので、当然のように平泉寺の僧侶は困り果てていた。また東尋坊はとある美しい姫君に心を奪われ、恋敵である真柄覚念という僧と激しくいがみ合った。僧たちは皆で相談し東尋坊を海辺見物に誘い出した。酒盛りが進み、うとうとと眠り始めた東尋坊を同行した真柄覚念がここぞとばかりに絶壁の上から海へ突き落とした。東尋坊はまたたくまに崖の下へと落ち、波間に沈むやいなや、それまで太陽の輝いていた空は、たちまち黒い雲が渦を巻きつつ起こり青い空を黒く染め、にわか豪雨と雷が大地を打ち、大地は激しく震え、東尋坊の怨念がついには自分を殺した真柄覚念をもその絶壁の底へと吸い込んでいった。

以来、毎年東尋坊が落とされた4月9日の前後には烈しい風が吹き、海水が濁り、荒波が立つという。恠…不思議なこと。怪異。

兀…高く突き出たさま。

攀…よじのぼる。

因果…すべての物事は、前の行いのよしあしによって後の運命のよしあしがきまること。業僧…僧侶。

## 同 永平寺

渴仰祖師功德全。

渴仰す祖師 功德の全くを。

開基僻遠妙因縁。

基を僻遠に開く 因縁妙なり。

天童教義紹真髓。

天童の教義 真髓を紹ぐ。

正法欲參文字禪。

正法 参ぜんとす 文字禪

渴仰…深く仏を信じること。心からあこがれ慕うこと。

僻遠…ある地域・場所が中央から遠く離れていること。また、その地域・場所。因縁…手づる。つて。

正法…仏教で、正しい法(教え)のこと。邪法に対する語。

## 同 福浦地藏

能州石佛解哀憐。

能州の石仏 哀憐を解す。

半裸腰巾坐艸氎。

半裸 腰巾 草氎に坐す。

一夜花魁悲願急。

一夜 花魁 悲願 急なり。

# 狂風翻浪忽留船。

狂風 浪を翻(くつがえ)して 忽ち船を留む。

福浦地蔵：福浦の腰巻地蔵。北前船で賑はった能登の羽咋郡富来町、福浦の港には、遊女の街が栄えた。昔一

人の遊女が、なじみの客との別れを惜しみ、少しでも長く港に留めるために、海辺の地蔵さまに腰巻を掛けた。すると海が荒れ、船は出帆を取り止めたという。

能登の福浦の腰巻地蔵は、けさも船出をまたとめた(野口雨情)

花魁：おいらん。

## 同 山中温泉憶先師

山中温泉先師を憶う

### 山中無客到。

山中 客の到るなし。

### 浴罷校新詩。

浴罷(やめ)て 新詩を校す。

### 先覺頻遊地。

先覺 頻遊の地。

### 掃苔觀古碑。

苔を掃って 古碑を観る。

先師：ここでは松尾芭蕉。芭蕉は「奥の細道」の旅の途中、山中温泉の出湯泉屋に杖を止め、薬師堂を詣で、温泉につかり、風光明媚な景色を心から楽しみ、山中を扶桑三の名湯と讃えた。そして「山中や 菊は手折らじ 湯の匂ひ(山中の湯に浴せば、中国の菊茲童が集めた不老長寿の菊の露を飲むまでもない。」「長寿を得るといふ意味の一句を詠んだ。芭蕉の句碑はこおろぎ橋西・白鷺大橋欄干・医王寺・ふれあい広場・あやとり橋下(道明が淵)・芭蕉堂傍・大木戸門跡・芭蕉の館前・北國銀行前(和泉屋跡)・黒谷橋・JR 大聖寺駅ホーム・大聖寺神明町全昌寺などに点在する。

先覺：物事の移り変わりを世人に先んじてさとること。学問・見識の上での先輩。  
頻遊：度々。

## 同 山中温泉蟋蟀橋

### 蟋蟀橋邊路。

蟬蟀 橋辺の路。

### 臨溪數落花。

臨溪 落花を数える。

### 垂絲人不語。

垂絲 人語らず。

### 翹首見歸鴉。

首を翹(あ)げて 帰鴉を見る。

こおろぎ橋…大聖寺川にかかる橋で、山中温泉のシンボルの存在。大聖寺川はこの橋から下流へ約一キロメートル余りの黒谷橋にかけて鶴仙溪と呼ばれる溪谷を作り景勝地として知られる。名前の由来は落ちると危険な事から「行路危」が転じたという説と昆虫のコオロギによるという二説が伝えられてきたが最近では「清ら木」から転じたとされる。

蟾蟀…コオロギ。

## 同 山中温泉巨杉

巨木人圍十五周。

巨木人は囲む 十五周。

參天黛色世無儔。

參天の黛色 世に儔無し。

靈泉迸處有奇瑞。

靈泉迸(ほとばし)る処 奇瑞有り。

閱盡二千三百秋。

閱(えつ)し尽す 二千三百秋。

巨杉…栢野の大杉。山中温泉栢野町の菅原神社の境内にある樹齡二千三百年と言い伝えられている御神木で、国の天然記念物にも指定されている。幹の周囲は十一メートル、高さ五十四メートルの堂々たる巨木で、樹の下から見上げると、天高く視界いっぱいに青々とした枝が広がっている。昭和二十二年十月二十七日、昭和天皇もご覧になられたスギで、別名天覽の大杉とも呼ばれる。

參天…天高く伸びるさま。

儔…ともがら。同列の仲間。

奇瑞…めでたいことの起こる不思議な前兆。瑞相。

## 次韻以祝高橋藍川翁華甲

次韻以て高橋藍川翁の華甲を祝す。

百歲猶餘四十秋。

百歲猶余す 四十秋。

詩壇禪林共悠悠。

詩壇 禪林 共に悠々。

大人業績已千載。

大人の業績 已に千載。

觀喜隨緣一唱酬。

歡喜 隨緣 一唱酬。

高橋藍川…名は宗雄、道号は泰道、藍川と号す。齊号を撃竹山房。別に夢笛楼と号す。和歌山県臨濟宗成道寺に生まれる。父より詩法を学ぶ。少壮にして上村亮剣に師事。昭和十五年『黒潮吟社』を創立。月刊詩誌『黒潮集』を発刊。著書に『藍川詩集』『漢詩講座』『藍川百絶』『藍川百律』等。

華甲…六十一歳のこと。華の字を分解すると十の字六個と一の字になることから。甲は、十干の第一で、歳。

隨縁…縁に従うこと。縁に従って種々の相を生じること。  
唱酬…自作の詩歌・文章を互いにやりとりすること。詩歌の唱和。

## 祝RCA會長サーノフ閣下入社六十年

RCA会長サーノフ閣下入社六十年を祝す。

刻苦凝神六十年。 刻苦凝神 六十年。

無雙鴻業拓幽玄。 無双の鴻業 幽玄を拓く。

昭昭宇宙文明澤。 昭々たり宇宙 文明の沢。

偉績乾坤萬世傳。 偉績乾坤 万世に伝わらん。

凝神…精神を集中させる。

無双…比べるものがないほど優れていること。無二。無比。無類。

鴻業…大きな事業。

昭々…くもりなく照り輝く様子。明らかな様子。

## 江樓邀客

江樓客を邀える。

江上霜飛鴻雁秋。 江上霜は飛ぶ 鴻雁の秋。

夕邀遠客醉高樓。 夕に遠客を邀(むか)えて 高樓に酔う。

尊前爲問故山事。 尊前為に問う 故山の事。

紅樹白雲無恙不。 紅樹白雲 恙(つつ)が無きや不(いな)や。

鴻雁…雁。

故山…ふるさとの山。転じて、故郷。

## 丙午中秋與有快鶴齋綾子遊于潮來

丙午中秋 村上有快・野内鶴齋・松本綾子と潮來に遊ぶ。

行渡刀江向北東。 行く行く 刀江を渡って 北東に向う。

蘇翁碑字聳秋空。

蘇翁の碑字 秋空に聳ゆ。

水郷之美冠天下。

水郷の美 天下に冠たりと。

筆挾風霜氣自雄。

筆風霜を挾んで 氣自ら雄。

松本綾子さん…芳翠先生の姪っ子。

刀江…利根川。

憶昔桂濱月下游。

憶う昔桂浜 月下の遊。

壯年客氣醉高樓。

壯年 客氣 高樓に酔う。

今宵照髮圓如鏡。

今宵 髪を照して 円鏡の如し。

十二橋頭三五秋。

十二橋頭 三五の秋。

桂浜…高知県高知市浦戸に位置し太平洋に臨む海岸。土佐民謡「よさこい節」にも詠われ、月の名所として

名高い。裏山の浦戸城趾は戦国の昔、長宗我部元親の居城として四国統一の中心となったところである。

十二橋…潮来十二橋めぐり。前川水門橋からはじまり、サツパ舟で、あやめ橋、雨情橋、思案橋、水雲橋、潮

音橋、天王橋、出島橋、まこも橋、千石橋、上米橋、前川橋の十二の橋を巡って行く。

銘酒芳醇魚細鱗。

銘酒 芳醇 魚は細鱗。

秋天如拭淨無塵。

秋天 拭うが如く 浄め無尽。

良宵十二橋邊月。

良宵 十二橋辺の月。

遍照風流翰墨人。

遍く照らす 風流 翰墨の人

細鱗…小さな魚。

載酒扁舟漾靜漣。

酒を載せて 扁舟 静漣を漾(ただよ)わす。

煌煌明月在中天。

煌々たる明月 中天に在り。

忽疑水上衆星落。  
幾點橋燈流照舷。

忽ち疑う水上 衆星 落つるかと。  
幾点の橋灯 流れて舷を照らす。

扁舟…サツパ舟。舟底のたいらな小舟。  
静漣…静かな小さい波。

煌々…暗夜にきらきらと輝く星。  
衆星…多くの星。

潮來潮去覺鄉愁。  
往昔騷人多愴秋。  
何事此宵頻有快。  
團欒月下棹輕舟。

潮来に来て 去る 郷愁を覚ゆ。  
往昔 騷人 多く秋を愴(いた)む。  
何事ぞ此宵 頻(しき)りに快 有り。  
団欒 月下 輕舟に棹さす。

往昔…すぎ去った昔。いにしえ。 往古。 往時。  
快 有り…村上有快氏に掛けた語。

## 歸省

星移物換有風光。  
七十餘齡省故鄉。  
鎮守老松寺山月。  
搖籃天地感懷長。

星移り物換れども 風光あり。  
七十余齡 故郷を省す。  
鎮守の老松、寺山の月。  
搖籃の天地 感慨 長し。

芳翠先生瓢詩碑…十一月二十七日、四国五十五番靈場南光坊の境内に瓢詩碑が建立され、詩碑披露が催された。  
瓢の碑は芳翠先生が医戒によって禁酒を断行されたので愛用の瓢を南光坊に奉納なされ、

瓢兮吾與汝

瓢や 吾れ汝と

涉世幾浮沈

世を涉って 幾浮沈



# 醉裏乾坤在

醉裏 乾坤在り

## 同論夙昔心

同(とも)に論ず 夙昔の心

の詩が刻された。この詩碑建立の縁起は、川村驥山先生が四国巡礼の際、今治で織田子青先生に呼び止められ、南光坊に遍路笠奉納となり、笠寺碑が建立された。その時すでに子青先生は芳翠先生の碑を並べ建てる事を計画されたという。子青先生の筆塚も建立されている。

芳翠先生は十一月二十二日、寝台特急あさかぜで東京を出発し、翌朝尾道に着く。巡航船で瀬戸内海を巡り伯方島へ。芳翠先生の弟の梅溪先生のお宅に落ち着く。二十四・二十五日は墓参旁々伯方島観光。二十六日、今治へ。子青先生の案内で美賀登本館に泊まる。二十七日、詩碑披露の後、鈍川温泉へ。二十八日、今治港に戻り水中翼船で来島海峡の渦潮を押し切り、尾道へ。新幹線ひかりで東京に戻られた。

揺籃：子供の時期を送った環境・時代。

## 伯方島周遊

快車扶老度崔菟。

快車 老を扶(たす)けて 崔菟を度する。

一島周邊恣眺廻。

一島の周辺 眺を恣(ほ)しいままにして廻る。

點點松洲浮碧海。

点々たり 松の洲 碧海に浮び、

班班帆影往還來。

班々たり 帆影 往(い)きて還た来る。

伯方島：瀬戸内海中部にある越智諸島の島で、芳翠先生の弟の梅溪先生のお宅がある。

崔菟：山の、石や岩がごろごろして高く険しい様子。また、建物が高く聳えている様子。

度する：迷いをとりのぞき、すくう。済度する。

## 南光坊即事

雙壽碑成與友親。

双寿 碑成つて 友と親しむ。

南光坊裡興懷新。

南光坊裏 興懷 新たなり。

尊前不聽塵縁事。

尊前 聴かず 塵縁の事。

盡是風流翰墨人。

尽く是れ風流 翰墨の人。

名が付いている。

興懷…盛んになること。興ること。

塵縁…世の中の係わり合い。俗世間の煩わしい人間関係。

奉納愛瓢于南光坊

愛瓢を南光坊に奉納す。

老來禁飲酒。

老来 飲酒を禁ず。

爾汝頓無聊。

爾汝 頓(とみ)に無聊。

何若光坊客。

何若 光坊の客。

碑成献愛瓢。

碑成つて 愛瓢を献ず。

爾汝…人を、軽んじたり、なれなれしくしたりして呼ぶときのことば。おまえ。

無聊…何もすることがなくて、何となく淋しい(心が満たされない)こと。暇をもてあそぶこと。退屈。つれづれ。

何若…いかに。どのように。

光坊…南光坊。

〔子青翁次韻〕

南光坊庫裡。

南光坊の庫裏。

孤笠啣無聊。

孤笠 無聊を啣つ。

樗叟恂醫戒。

樗叟 医戒を恂(おそ)れ。

献來爾汝瓢。

献じ来る 尔汝の瓢。

鈍川温泉

浴羅溪樓圍卓斟。

浴 罷(や)めて溪楼 卓を囲んで斟む。

十年孤負故山潯。

十年 孤負す 故山の潯(ほとり)。

阿矯収撥時饒舌。

阿矯 撥(ばち)を収めて 時に饒舌。

## 側耳貧聞郷土音。

耳を側(そばだ)てて食(むさぼり)り聞く 郷土の音。

鈍川温泉：愛媛県今治市玉川町にある温泉。源泉温度二十二度。「美人の湯」といわれる。源泉中のラドンの含

有量が多い。鈍川溪谷は蒼社川支流木地川が花崗閃緑岩を刻んだ溪谷で、源泉は鈍川溪谷の岩隙より噴

出している。緑なす山々に囲まれ、清らかなせせらぎの音と鳥の声だけが谷間をわたる。

溪楼：旅館。

孤負：そむく。

阿嬌：阿嬌。美人のこと。

## 歸京途上

艇翦煙波張翼航。

艇は煙波を翦(き)り 翼を張って航す。

車馳幹線引光芒。

車は幹線を馳せ 光芒を引く。

十時分手發今治。

十時 分手 今治を發し。

電彩輝初還帝郷。

電彩輝く初め 帝郷に還る。

光芒：きらきらする光。ほのあかく広がる光線。

分手：人と人が別れる。

帝郷：東京。

## 丁未元旦 昭和四十二年

累年詩酒癖。

累年 詩酒の癖。

割愛勒瓢碑。

割愛 瓢碑を勒(ろく)す。

試墨何須醉。

試墨 何ぞ酔を須(もと)めん。

迎羊筆一枝。

迎羊 筆一枝。

割愛：惜しいと思ひながら、思いきって手放したり省略したりすること。

## 宸題 魚

不吹還不釣。  
吹かず 還釣らず。

把竹只詩書。  
竹を把るは 只詩書。

自適悠悠客。  
自適 悠々の客。

臨池逸大魚。  
臨池 大魚を逸す。

還…また。

不吹還不釣。  
吹かず 還釣らず。

弄竹只詩書。  
竹を弄する 只詩書。

自適臨池室。  
自適 臨池の室。

悠然見躍魚。  
悠然 躍魚を見る。

有人評小作。  
人有り 小作を評す。

舐筆校詩書。  
筆を舐めて 詩書を校す。

君子推初稿。  
君子 初稿を推す。

宸題得二魚。  
宸題 二魚を得たり。

祝宥快師昇位  
宥快師の昇位を祝す。

數遊西域究其眞。  
数々西域に遊んで 其の眞を究む。

濟度衆生重佛因。  
衆生を濟度して 仏因を重ねる。

今日榮光非偶爾。  
今日の榮光 偶爾（のみ）に非ず。

一言一行自超倫。  
一言一行 自ら超倫。

爾…文末に用いる助詞。限定や強意の意を表す。  
超倫…人並み外れて優れていること。

## 偶 成

墨痕如鳥迹。 墨痕 鳥迹の如く。

養拙學蝸涎。 養拙 蝸涎を学ぶ。

苦茗三杯妙。 苦茗 三杯の妙。

華胥夢亦圓。 華胥 夢亦た円かなり。

養拙…生まれつきの素朴さを養う。

蝸涎…よだれ。

苦茗…にがい茶。品質の悪い茶。

三杯…中国・四国地方で「田の神」のこと。「三杯」「三拝」「三把」「三被」なども当てて書く。

華胥…中国古代の天子黄帝が昼寝の夢に見て、そこに遊んだという華胥氏の国。身分の差別や利害・愛憎による争いなどがなく、自然に治まっているという理想郷。

『列子』黄帝篇に、「晝寢而夢、游于華胥氏之國。華胥氏之國在弇州之西、臺州之北、不知斯齊國幾千萬里。蓋非舟四足力之所及、神游而已。（昼寝して夢み、華胥氏の国に遊ぶ。華胥の国は北西の果て、舟や人力でいけない神の国。）」とある。

## 丁未誕日次野方翁見惠瑤韻 丁未誕日野方翁の恵まるる瑤韻に次す。

亦復迎生日。 亦た復たび 生日を迎え。

春園欲事繁。 春園 事繁からんとす。

老樗非舊態。 老樗 旧態に非ざるも。

猶占一乾坤。 猶占む 一乾坤。

## 金婚

相愛協和開一門。

相愛協和 一門を開く。

媼翁携手列金婚。

媼翁 手を携えて 金婚に列す。

災殃閱盡餘何物。

災殃 閱し尽して 何物を余す。

無數鶯賓與墨痕。

無數の 鶯賓と墨痕と。

災殃…災い。

鶯賓…書家の来賓。

## 次韻以酬

次韻以て酬ゆ。

半在繩牀半筆牀。

半ば繩牀に在り 半ば筆牀。

旅程時至任醫方。

旅程 時至つて 医方に任す。

周遊南紀得佳什。

周遊 南紀 佳什を得ば。

先寄大人需正章。

先づ大人に寄せて 正章を需(もと)めん。

繩牀…繩床。木の床に縄または木綿の布を張った、粗末な腰掛け。主に禅僧が座禅のときに使う。

筆牀…文房具の一つ。筆を置く、皿状の物。

佳什…すぐれた詩や歌。立派な詩文。

正章…正しい詩文。

## 病林吟

豪氣欲探南紀天。

豪氣 探らんと欲す 南紀の天。

臨行臥病是因縁。

行に臨んで臥病 是因縁。

豈追徐福求仙藥。

豈に徐福を追つて 仙藥を求めん。

夢繞蓬萊第一泉。

夢は繞る 蓬萊 第一の泉。

東海中の三神山（蓬萊、方丈、瀛洲）に仙人や不死の仙薬を求める探検に巨額の援助を受ける。徐福は日本の熊野に来たのだという伝説のほか、亶洲は種子島とする説、あるいは彼がすなわち神武天皇で、日本に入って国を立てたのだとする説などがあるが、いずれも実証を欠く。

## 戊申歳端 昭和四十三年

二豎漸衰迎戊申。 二豎漸く衰えて 戊申を迎える。

古稀更得五逢春。 古稀更に得たり 五たび春に逢うを。

追懷手寫八僊賦。 追懷手づから写す 八僊の賦。

君子陶陶如有神。 君子陶々 神有るが如し。

二豎…病魔。病氣。『春秋左氏伝・成公十年』に、「晋の景公が病氣になり、秦から名医を呼んだところ、医者が着く前に景公は、病氣の精が二人の童子となって、膏と盲の間に逃げ込む夢をみた。医者が到着し、景公を診察すると「膏と盲の間に病氣があり、薬も針も届かないので治療のしようがありません」と言ったので、景公はその医者を厚くもてなした。まもなくして景公は没したという。」とある。

八仙…道教の仙人のなかでも代表的な存在であり、中華社会のいかなる階層の人にも受け入れられ、信仰は厚い。日本における七福神のようなもので、掛け軸や陶磁器に描かれるめでたい絵の題材になるなど様々な芸術のモチーフとなっている。

陶々…打ち解けるさま。ゆったりするさま。

## 歳朝試筆

瓶梅花底舉椒觴。 瓶梅花底 椒觴を挙ぐ。

硯海雲生湛古光。 硯海雲生じて 古光を湛（た）える。

筆不龍跳臨晋帖。 筆不（筆にあらず）竜跳つて 晋帖を臨す。

洛神殘賦十三行。 洛神の殘賦 十三行。

椒觴…杯。

洛神十三行…王献之の小楷。この賦は魏の曹植の文で、献之の書いたものは前後を欠き、中間の十三行だけが南宋時代に刻された石刻とその拓本として遺存している。

## 震題 川

寒泉一道水潺潺。

寒泉一道 水潺潺。

流入清谿下碧山。

流れて清谿に入り 碧山を下る。

時激斷崑奇石韻。

時に激す断崑 奇石の韻。

也浮紅樹白雲閑。

也(また)浮ぶ紅樹 白雲の閑。

潺々…水がよどみなく流れるようす。また、その音の形容。

断崑…断看。きり立った険しい崖。

## 祝佐伯阪本兩家慶事

佐伯坂本兩家の慶事を祝す。

高山與流水。

高山 流水と。

窈窕結佳縁。

窈窕 佳縁を結ぶ。

峨峨千秋嶺。

峨々たり 千秋の嶺。

洋洋萬歲川。

洋々たり 萬歳の川。

窈窕…しとやかで美しい様子。上品で奥ゆかしい様子。

峨々…山・岩などが、高くけわしくそびえている様子。

洋々…前途がひらけ、将来が限らない希望に満ちている様子。

## 寄書海社山陰羈旅一行

書海社山陰羈旅一行に寄す。

天橋觀止倒乾坤。

天橋 觀止、乾坤を倒し。

變幻沙丘分曉昏。

變幻の砂丘 曉昏を分つ。

恰似山陰書聖迹。

恰かも似たり山陰 書聖の迹。

幽玄自在駭心魂。

幽玄自在、心魂を驚かす。



山陰旅行：五月二十四日から二十六日に実施された書海社役員親睦旅行。芳翠先生はお体を氣遣って参加されなかった。

祝吉田栖堂君華甲

吉田栖堂君の華甲を祝す。

克服時艱拂宿痾。

時艱を克服して 宿痾を払う。

多年玄海養鵞群。

多年 玄海 鵞群を養う。

今迎華甲歡無極。

今華甲を迎えて 歡び極まりなし。

長駕狂風萬里波。

長く駕せよ狂風 万里の波。

吉田栖堂：明治四十一年、愛知県生まれ。書を志し上京。芳翠先生に師事。四十九年に玄海社を創設し、競書誌『玄海』を発行。長年にわたって衆参両議院議席標を揮毫したことも知られる。八十年、七十二歳で死去した。

時艱：その時代の当面の難題。

宿痾：以前の病氣。宿患。宿痾。

## 偶 成

成童志學惜居諸。

成童学に志して 居諸を惜しむ。

白髮把毫辨魯魚。

白髮毫を把って 魯魚を弁ず。

識字誰言憂患始。

識字 誰か言う 憂患の始めと。

橫行天下沒文書。

天下を横行す 没文の書。

居諸：月日。歲月。

魯魚：文字の誤り。

魯魚とは『抱朴子』内篇・遐覽に、「故諺曰、書三寫、魚成魯、虛成虎。（故に諺に曰く、書は三たび写せば、魚は魯と成り、虚は虎と成ると。）」とある。

こうした誤りの例は、『去來抄』に、其角の句「此木戸（このきど）に錠のさゝれて冬の月」を芭蕉が「柴戸（しばのと）に錠のさゝれて冬の月」と読み違えて、凡庸な句だと誤解したとの逸話などが見られる。

憂患：心配と悩み。氣がかり。心痛。